

第21回京都文化芸術都市創生審議会 摘録

日時 令和2年11月19日(木) 午後3時30分～午後5時30分

場所 京都市京セラ美術館 講演室

出席委員(敬称略):

＜現地会場＞池坊専好会長, 赤松玉女副会長, 笹岡隆甫副会長, 荒木美弥子委員,
奥野史子委員, ジョナ・サルズ委員, 杉本歌子委員, 田中誠二委員,
谷口かんな委員, 松田規久子委員, やなぎみわ委員, 村上圭子委員

＜オンライン＞青木淳委員, 河島伸子委員, 建畠哲委員

事務局:

北村信幸文化芸術政策監, 砂川敬文化芸術都市推進室長, 船橋律夫文化交流推進担当部長,
川口伸太郎美術館担当部長, 山口壮八文化財担当部長, 東憲明担当部長ほか

1 開会

(村上副市長挨拶)

委員の皆様には大変御多忙の中御参加いただき感謝申し上げます。本日の審議会では皆様に協力いただいて策定した第2期京都文化芸術都市創生計画等の進捗, 京都市の事業の内容などを説明させていただき, 大所高所からの御意見, 御提案を頂きたい。

前回の審議会からコロナの影響を受けて一転したような状況であり, 今年度に入ってから, 京都市は文化芸術の灯を維持するために, 全国に先駆けて文化芸術活動緊急奨励金を交付した。5月には文化関係者の皆様にアンケート調査を実施して, 必要とされていることを把握したうえで, クラウドファンディングによる支援を行うなど, できるだけのことをやってきたつもりである。これらの支援策を通して, やはり文化芸術は大事だったのだということにも気付いていただけたと考えている。

本日の会場である京都市京セラ美術館は1933年に開館した古い美術館で, 今年の5月にリニューアルオープンしたばかりである。新しい時代に向けた象徴的な施設での開催であり, 委員の皆様には忌憚ない御意見を頂き, 前向きな議論ができればと考えているので, よろしくお願い申し上げます。

2 議事

(1) 会長・副会長の選任について

別紙のとおり選任

(2) 本市の文化芸術政策の現状と方向性について

別紙のとおり意見交換

3 閉会

(別紙) 意見交換摘録

(1) 会長・副会長の選任について

<事務局>

会長については「京都文化芸術都市創生審議会の組織及び運営に関する規則」に基づき、委員の互選により選出することとなっている。事務局としては、前期に引き続き池坊専好委員に会長に就任いただいてはと考えているが、いかがか。

<委員一同>

(拍手)

それでは池坊委員に会長に就任いただく。続いて、副会長については、委員の中から会長が指名することになっているため、池坊会長に意見を伺いたい。

<会長>

赤松委員，笹岡委員の2名に副会長に就任いただきたいと考えているが，いかがか。

<委員一同>

(拍手)

<事務局>

それでは副会長には赤松委員，笹岡委員の2名に就任いただく。以降の議事進行については，池坊会長にお願いします。

(2) 本市の文化芸術政策の現状と方向性について

<会長>

本日は平成29年度から10年を計画期間とする「第2期京都文化芸術都市創生計画」の進捗や、今年度の主な取組について事務局から報告していただき、新型コロナウイルス感染症の影響も踏まえた、今後の文化芸術政策の方向性について議論してまいりたい。新型コロナの影響を受け、社会・経済・文化の状況は大きく変わっている。委員の皆様には忌憚ない御意見を頂ければと思う。

まず、「第2期京都文化芸術都市創生計画」の進捗や今年度の主な取組について事務局からの説明をお願いする。

(※資料1, 資料2に基づいて事務局から説明)

<会長>

事業等の進捗に加え、新型コロナの影響が続く中、文化の灯を絶やさないように様々な取組を行っていることを報告していただいた。ここからは全体を通して、委員の方々からの御意見や御提案をお願いしたい。各委員に発言いただき、委員同士で議論を深めていければと考えている。

<委員>

京都市には文化芸術に関わる多くの補助事業に取り組んでいただいております、まずは感謝を申し上げます。当方もアルコール消毒液やマスクの購入に際して、補助事業に参画させていただいた。今まさに、経済とコロナ感染症をどのようにやり過ごしていくかという渦中におり、全く先の見えない状況である。

京都市の財政状況が非常に危機的であると同様に、他の団体も同様に厳しい状況である。これらの状況で、何をどうしていけば良いのか、他の委員の御意見をお伺いして、私自身も何とか先の見通しを持ちたいと考えている。

<委員>

新型コロナにより、日本全国の人との交流が制限されるようになった。その中で、多彩な支援策を講じて、アーティストや文化芸術関係者を下支えしていく施策を実施していただき、改めて感謝申し上げます。観光の視点から申し上げますと、京都の主要ホテルの客室稼働率は、国内の客を中心と言いつつもピークには程遠く、観光産業は大変厳しい状況である。日本の場合、活動が制限されると、文化は不要不急に位置付けられることが多い。そこで、アーティストを含めた文化芸術施設の関係者と共に、各施設やその他様々な拠点が安全安心であるという認知度を高めていく取組が非常に重要である。本日の会場である京都市京セラ美術館でも、エントランスから検温、消毒などの徹底した安全対策が取られていた。個々の主体の取組が大きな輪となって、京都の文化芸術の振興・支援の取組とともに、文化

芸術活動を止めないための取組として、日本全国に広がっていけば良いと思う。

また、予算面が大変厳しいということであるが、例えば海外からのアーティスト・イン・レジデンスの招聘が難しい際に、各都道府県の卓越した実績のあるアーティストを京都に呼ぶなど、予算のボリュームは分からないが、これまでにあった常識を適合させ、新しい着想で取り組んでいくことが重要であると考えている。

<委員>

「ようこそアーティスト」、「ようこそ和の空間」事業は、子どもたちへの文化の継承に非常に大きな役割を持っているが、今年度は新型コロナの影響で中止になった。若手を育てる担い手の継承を止めないことが何より大事なことである。教育委員会で中止の決定をしたため、致し方ないことではあるが、どうやって文化を途切れさせないかをもう少し考えたほうが良い。GIGA スクール構想によって、国と京都市の予算で1人1台の専用端末が配備されており、これを活用しながら、来年度はウェブを通してでも、文化を子どもたちに伝えていくことが必要であると考えている。

東京オリンピック・パラリンピックの開催是非が分からない状況であり、IOCのバッハ会長が来日して、前向きに実施する方向性を示したが、国民感情としては、まだまだこんな時に開催していいのかという意見があるかと思う。このように緊急事態・非常事態の際は、文化やスポーツは必要なのだろうか、という議論になりがちである。しかし、阪神淡路大震災や熊本地震の際、多くのアスリートやアーティストが、被災地の方々に力を与える活動をしたように、人に夢や希望や力を与えるパワーが、文化やスポーツにはあると考えている。生きることが一番大事ではあるが、人はより良く生きる必要があり、そのためには文化やスポーツの力が必要である。

非常に財政が厳しいことは承知しているが、色々な知恵や工夫を絞り、とにかく途切れさせない努力をしてほしい。他都市にはない京都市の力を見せるところではないかと考えている。開催を心配していた二条城まつりが今年も行われている。屋外での実施を検討するなど、今までの形式に捉われず、積極的に継続させていくことが重要である。

<委員>

今年は本当であれば KYOTOSTEAM と京セラ美術館のオープンという大きなイベントがあり、京都の文化活動の更なる発展をお祝いできる年であったため、非常に残念な事態である。この状況下で、延期や規模を多少縮小してでも活動を続けており、それに関する様々な支援策を実施していることは、大変心強いと思っている。長期的な計画として、京都市立芸術大学の移転や、それに合わせた整備計画も着実に進んでいるようで、財政が厳しいことは理解しているが、続けていただきたいと考えている。

頂いた資料の中で、「オンライン配信サポート オンライン公演モデル事業」について質問がある。令和2年3～5月は、とにかく無料で色々なことをやろうと様々な人が工夫してオンライン配信を行った。オンラインに適したフォーマットなどの試行錯誤が続いており、徐々に消費者もオンライン用のコンテンツに慣れ、求めるレベルが高くなっている。この数

カ月の中で、有料でもコンテンツを見ようとする人がいることが見えてきた。そこで、このオンライン公演モデル事業の採択4件は、芸術文化団体なのか、それをサポートする事業者なのか、説明を頂きたい。

<事務局>

オンライン公演モデル事業は、先日、第一弾として11月5日に京都市交響楽団メンバーによるアンサンブル・コンサート「京都しんぷおにえった」公演を配信し、その他にも演劇や伝統芸能の配信を今後予定している。これは参画する団体に応募いただき、それぞれの分野でどのように配信を行うかを実際に体験していただき、そのノウハウをできるだけ広くオープンに周知していただくことを目的としている。また、オンライン技術に関する連続講座には、オンライン配信に挑戦してみたいがあまり機械に詳しくない芸術家の方も多くおり、その方々に向けてサポートを行っている。

<委員>

承知した。連続講座もよくできた内容であるので、このような取組を続けて欲しい。

<委員>

新型コロナは資料1の1ページにある5つの目標全てに対して大きな影響を与えている。美術館でも、コロナによって人数を制限する必要があるほか、心理的に美術館に行きづらくなっており、当初予定していた人数が入らないので、経済的にかなり厳しい収支になっている。京都市の財政状況について説明があったように、もう少し先のことを考えると、文化芸術に関連する予算を減らさざるを得ないことになる。そうすると5つの方向性の中の「文化と経済の好循環」が立ち行かなくなることを意味する。予算を減らす際に、どの事業を優先し、どの事業をカットするか判断には大きな課題があり、収益が上がらない事業がカットされやすい状況になることを懸念している。次の世代を育てる活動や、若い人が活動する基盤を作ることは、収益は上がらないが文化を継続していくためには必要である。来年度以降の文化芸術政策の方向性の議論の中では、文化の経済の好循環と言いづらい中で、どのように文化活動を支援できるのかを考えたい。

<事務局>

文化と経済の好循環について、以前から財政的に厳しい状態であったところに、さらにコロナの影響があり、非常に厳しくなっている。二条城の取組も挙げていただいたが、文化財の世界でも修理や維持継承に費用がかかるため、お金を稼ぐ必要がある。二条城の場合は大変恵まれた環境にあるが、その条件が整っているところは非常に少なく、何とかコロナ社会の中で新たな循環を生み出していく必要がある。

また、京都市京セラ美術館もリニューアルするまではほぼ貸館がメインであり、主催展も数えるほどであったため、それほど経費はかかっていなかった。しかし、リニューアル後には多くの主催・企画展を計画しており、投入する税金が約10倍になっている。そのことを

決意、覚悟してリニューアルしたところなので、収益の部分にも目が行くが、門川市長の方針としてもコロナだから何もかも中止あるいは縮小ということではないという指示もあり、未曾有の財政難に対して、創意工夫をして進めていきたいと思っている。

<委員>

京都市文化芸術活動緊急奨励金は、国や他の自治体と比較しても最も成功した例であると思う。私は文化庁の方の美術関係の助成金の制度設計に関わり、京都市の手法を参考にしながら制度設計したが、書類の作り方も難しく、支給に時間がかかった。京都市は非常にスピード感をもって対応している。また、補助金の申請や書類作成に慣れていないアーティストに対して支援を行う相談窓口を設けたことも評価できる。それ以外にもオンライン配信サポート交付金や両立支援補助金、ふるさと納税型クラウドファンディングと連動した支援策など、素晴らしい方法が採られている。これらの支援策はウィズコロナの対応であり、アフターコロナでは毎年続ける訳にはいかないと思うが、アーティストに寄り添った支援策が採られたということは、京都市ならでは、さすが「文化首都・京都」であるというように思う。他のいかなる自治体にも先駆けており、他の行政系の助成金の指針、モデルになるようなものであったため、激賞したい。

<委員>

新型コロナに対する支援策の緊急奨励金は、本当に活用しやすい奨励金であった。これまでに赤字を補填するような補助金は色々とあったが、若手は生活するだけで精一杯であり、赤字が少し軽減されるくらいでは厳しく、それが重なって大きな赤字となるだけである。同世代の活躍しているアーティストでも、「来月の家賃が払えない」、「明日食べるものがない」というような人がたくさんおり、少しでも自分の制作や音楽を続けたいという思いで、貯金を切り崩しながら生活している。アンケートでもわかったと思うが、コロナによって本当にお金がないことが露呈した。厳しい財政状況の中では難しいかと思うが、こういった奨励金は、規模や額を縮小したとしても絶対に続けていくべきである。

今回の奨励金の申請によって、多くの若手アーティストが、どのように地域と関わっていくのか、市民還元をしていくのかを考えた。美術分野の方は、普段から自分の社会との関わりを考えている人が多いと思うが、クラシックの演奏者には、大学では一生懸命練習してレパートリーを増やすことに専念し、いざ大学を卒業すると、何に手を付けていいのかわからないというような、マネジメント力や企画力が全くない人が多くいる。特にオンラインでの配信が始まってから、クオリティーの低い動画配信が蔓延してしまっている。それは演奏者がマネジメントや企画の方法を教わっていないことに起因している。若手アーティスト向けの研修や制度等を、行政からも充実させて欲しい。

また、資料1では美術分野は充実しているが、音楽業界は京響以外の音楽に関連する計画が見受けられなかった。京都には京都堀川音楽高校や京都市立芸術大学、京都市交響楽団など、全国的にみても若手の音楽家が沢山集まっており、今後は音楽方面の支援についても考えていただきたい。

<事務局>

非常に切実な思いを受け取った。アーティスト・芸術関係者に向けて実施したアンケートでもそのような声を沢山聞いたが、その声を施策に反映できたことが大きな成果であった。損失を補填してほしいという声も多かったが、相談情報提供を求める先が必要であるということで相談窓口を設置し、オンラインの展開の支援が必要であるということでオンライン配信モデル事業を実施した。また、活動の場がないという声も頂いており、近々、広報発表を行うが、音楽家も含め色々な芸術家の方に応募いただいて、活動とまちづくりの支援を行う「まちじゅうアート事業」を支援策として展開していく。演奏会などの開催も、収容率が限られており、感染状況が厳しい中でもあるため、そこに対しても文化芸術活動と感染防止策の両立支援の補助を行っていく。

今年度だけで終わりではなく、今後のウィズコロナの時代を見据え、引き続き様々な支援策を行っていく。アンケート調査も1回で終わることなく、継続して実施する。

<委員>

私も若い頃は、家のライフラインが全て止まるような極貧生活であった。美術の作家の方が比較的マネジメント能力が高い部分はある。自分の当時の生活を救ってくれたのは、グローバルな資本主義社会であり、ヨーロッパやアメリカのアートフェアに出品して、その作品を売ることによって生活を維持した。その時代のアーティストは同じ手法で生き抜いた人が多い。海外の有力なギャラリーに自身の作品を売り捌かれるのを経験すると、資本主義のシステムに対して懐疑的になるが、こうしなければ生き延びられないという葛藤を抱えながら過ごしていた。現代美術の分野だけかというと、コロナによってリーマンショック以上の衝撃を受けている。ヴェネチアビエンナーレや香港アートバーゼルも中止になるなど、世界中のアートシーンがマーケットを中心としてストップしている状態である。私個人としては、この状態が健全な状態であるような気もしている。ファッションもそうだと思うが、みんながジェットセッターになって世界中を飛び回り、物のやり取りや、同時に様々な場所で展覧会を開くなど、あまりにも過剰に加速していくばかりであった。今、どこにも行けなくなり、初めてその状況がストップしている。この期間は、作品を作ることににおいては大事な時間であり、私個人としては、作家にとって悪い状態ではないと考えている。しかし、これは美術の話であり、演劇や音楽、集団制作になると話は別である。

京都市からの支援は素晴らしい。アート市場活性化事業では海外アートフェアへの出展を止めて国内に目を向けているが、これもすごく大事なことであり、打って出ていくのではなく、自分を俯瞰して見て備えることも大事である。

演劇の小劇場などは大変な状況になっており、若いカンパニーはコロナ以前からただでさえ赤字のところ、さらにリスクが来て、辞めてしまうという判断になる。こうしてキャンセルが相次ぐと貸館である劇場も料金がもらえない。今後、できればシアターやギャラリーなど、場に対しての支援があれば、借りる方も貸す方も持続できるようになる。演劇や音楽では、元々商業的にお金が回っているところは、何とか必死で活動しているが、そうでは

ないところは、辞めていく判断になる。音響や映像は逆に仕事が増えている状況で、オンライン配信によって編集作業等が発生しているが、照明や舞台装置、舞台監督など現場の人には、別の仕事を検討している人も多くいる。今後はおそらく、支える方から薄くなっていくので、場に対する支援が必要になってくる。オンライン演劇も面白いが、やはり温度や重さなど、生の表現が感じられない部分が、今後の課題である。

<事務局>

場の支援では、ふるさと納税型クラウドファンディングを活用した京都市文化芸術活動再開への発表・鑑賞拠点継続支援を現在実施しており、京都市の75施設に対して支援をしている。目標金額は1000万円で、同額を京都市から上乗せして分配する。また、感染拡大の防止と文化芸術活動の両立支援補助も実施しており、施設を利用される際の利用費補助として施設・付帯施設の使用料の半額補助を上限40万円・最大5日間、感染拡大防止のための経費補助として音楽・演劇などの感染拡大の防止にかかる経費補助を上限50万円で行っている。

<委員>

若手芸術家の苦しみの話を聞いたが、能と狂言の役者も大変だと思う。施設の問題があり、古い能楽堂などでインターネット環境がないところは、配信の公演ができない。また、伝統芸能の先生たちや無形文化財の担い手の方で、あまり弟子をとっていない方は、舞台を配信することも難しくなっている。舞台ができなくなってもう半年になるが、お稽古くらいはオンラインでできるだろうと考え、この3箇月で3人の狂言の役者にオンラインの手法を教えた。電話で方法を説明してから実施したが、機器の設定も難しかったり、自分の家でお稽古をされる方々は、今までの舞台のように映らなかったりと苦戦していた。そのような人たちが、いきなり情報をインターネットで取得して、ネット上で助成金の申請を行うのは難しい。また、弟子たちもインターネットでの配信で、どうやってそれをお金にするかというマネジメントができる人が少ない。大学でもアートマネジメントを教えている学校は少ない。現場で実践することが教育になるが、演劇・ダンス・コンサートなど、現場がない限りは、芸術家が多い京都でも、マネジメントスタッフを教育する機会が少ない。

また、お寺や神社の話がここには出てこないが、それらの神楽殿、能舞台など、野外舞台での活動は、感染症対策が必要な現在の状況にとっても合っている。これらの舞台は京都に多く、活動を何かの支援を活用して来年の春からできたら良いと考えている。

クラウドファンディングについては、京都に永住している外国人や、京都でよくアーティスト・イン・レジデンスをしている芸術家などに対して、英語版の資料があれば、支援を頼めるかもしれない。

<委員>

京都は1000年を超える歴史があるということもあり、文化芸術が本当に大切に守り育てられてきた。このことが、京都に来て、この街の大きな価値であると感じる。コロナ禍

にあたって芸術家の方々が苦勞していらっしゃることは、リアルな生の声を聴いてよくわかった。様々な支援の施策は是非、今後も続けていただきたいと思う。また今は、実際に触れる、繋がる、体感することに飢えている部分がある。小規模であっても、どこかで実際に触れ合えたり、見ることができるような取組が継続されていくことが重要であると思う。

京都から全国、世界に向けて発信していくことは当然大事ではあるが、今こういう時だからこそ、京都の市民や府民の方々に、この街の価値をもう一度再発見してもらえよう取組に結び付いていけばと、委員の皆さんの意見を伺いながら感じた。

<委員>

3月ごろの取材では、オペラの中止の是非について、かなり大所帯の人たちが悩みながら検討し、動画の配信や、録画したDVDの作成・販売を行っていた。その際に、マネジメントをどうするのか、権利関係をどうするのかなど、一生懸命話し合っている姿を見て、その熱意に対して本当に敬意を払った。その後、6月に市民寄席などの舞台が復活した際も、コンサートでは今まで2部構成だった公演を4部構成で実施し、8人の出演者を2、3人に絞って、何とか観客の前で公演を行っていた。その熱意が通じて、チケットは全て売り切れで、誰一人欠席する人はいなかった。皆さんの文化に対する熱意は素晴らしく、その熱意に報いるため、アンケート調査や相談窓口の開設などを通して、状況が変わっても皆さんの思いを救い上げるような施策を続けてほしいと思った。

<副会長>

京都市の助成には大学の卒業生たちもお世話になっている。まだ若く、助成金を取ったことがない人や、助成金迷子になってしまう人向けにワンストップの相談窓口があるのはありがたい。アンケートについても、アンケートを通して自分の意見を言えるというだけでもかなりの救いであったのではないかと思う。その意見については今後、生かしていただきたい。また、卒業生の話では、今年は例年以上に助成金があって助かるが、来年度以降のことを考えると、民間からの助成などもまだ弱く、心配であると言っていた。引き続き色々な形での助成を続けてほしい。ワクチン等が開発されたとしても、様々なことでダメージを受けており、回復期と考えていただきたい。

また、音楽について、大学では今まで演奏会は無観客の配信で実施してきたが、昨日、春以降に初めて観客を入れてのコンサートを開いた。150名限定の先着申込み制で実施し、集客が難しいのではないかと懸念していたが、普段よりも多くの方が来場希望してくださり嬉しい結果になった。大学では教育目的であるため、今回の場合お金はとっていないが、このことが卒業生たちのように、厳しい状況の中チケットを売らないといけない人たちを苦しめることになっているのではないかとも思った。また、キャリア教育を近年実施しているが、助成金の取り方など大学として考えていかなければならないと思っている。

もう一点、経済を回すという部分で、これから活躍していく若いアーティストたちの若い時期の作品を、デジタルアーカイブだけでなく、実物で保管できる場所があると良いと考える。作品の保管場所があれば大切に置いておきたいという若い人たちは沢山いる。芸術家と

して認められれば、その作品も将来販売され、京都に還元されていくことになる。芸術家として育てていくのには時間がかかる。アトリエやギャラリーだけではなく、若いアーティストたちの作品の保管にも、知恵を出していただけたらと思う。

<副会長>

大きく3つの意見がある。1つは京都市が文化を回していくという強い思いを持っていることは非常に素敵だと思う。私自身は自粛期間中、3箇月ほど無職の状態が続いた。文化は本来、人と人とがぶつかり合って生まれるもので、それを禁止されるという悩みがあったところに、単なる補助金ではなく、活動に対して補助を出すというスタンスはすごく良く、文化を回していくという気持ちを感じられた。実際に回すことには消毒、検温、ソーシャルディスタンスの確保など、様々なお金がかかる。この大変な部分に対しても支援があることは本当にありがたい。

2点目は他の委員と同じ意見で、高齢者へのサポートは欠かせないと思う。もちろん若い世代への支援も大事であるが、それと共に高齢の文化の担い手は一回離れると戻ってこられないことがある。これはすごく残念であり、そういった方々を置き去りにしないことが大事だ。オンラインでフォローできるのが良いが、高齢者はその分野が非常に弱いので、本来ITの最大の受益者であるべき、最も弱い高齢者にもサポートができるが良い。

3点目は財政難について、我々文化の担い手はとにかく稼ぐのが下手であり、それを補う手法としてクラウドファンディングは非常に良いと思う。今回はふるさと納税型であるが、京都市がさらに工夫を重ね、多くの京都の文化のファン方々がサポートできる仕組みづくりを行っていくことは不可欠である。京都市立芸術大学が移転した後の跡地活用や、閉校になった学校の跡地活用などは、お金を稼ぐのが得意な専門家の人たちの意見を聞きつつ、考えていただき、それを文化に回していただけるとありがたいと考えている。

<会長>

自分もずっと活動できない状況であったが、10月に花展を開催した。その際、どのようにソーシャルディスタンスを取るかなど、基準や成功事例を1つずつ積み重ねていくことが、後に生かせる、1つのきっかけとなるように感じる。コロナの感染状況によりその基準は変わるが、成功事例を掲示していくことが非常に大事である。コロナは参加する側、作り出す側の双方に非常に大きな影響を与えている。コロナの下で気持ちが後ろ向きにならず、参加する、携わる双方が少しでも前向きな気持ちでいれるように、環境を整えるべきであると考えている。

<村上副市長>

京都市の施策を激賞いただき、助かったという御意見も頂いた。私たちもコロナ禍の中でこの予算をどう組み立てていくか、係員から市長まで、皆で悩みながら作った制度であるので、嬉しく思う。基礎自治体だからできたことも多く、市民や担い手の皆さんと距離が近いからこそ、アンケートも実施でき、直接の声も聴ける。この強みを生かして、お金がない中

で、本当に必要なことや優先しないといけないことを、選りすぐってやっていくことができればと思う。

また、コロナ禍だからこそオンライン化が進んだように思う。福祉施設に入っている高齢者の方が、家族との面会を禁止されている中で、何とか声を聴きたいという思いを叶えるため、オンライン面会が普及してきた。これも京都市の福祉施設が悩みながらも導入してくれたおかげであり、デジタル化が非常に進んでいる。お金がなくて苦勞することも、コロナで苦勞することも、悪いことばかりではなく、次のステップのための役に立っていることがあると思う。本日、委員の皆様から頂いた御意見を踏まえ、皆で頑張りたい。

<事務局>

会長、委員の皆様には長時間にわたり御審議いただき感謝申し上げます。文化芸術は不要不急なのか、という話をしようかと思っていたところ、委員からも御意見があったように、スポーツも含めて文化芸術は不要不急ではなく、「人がより良く生きるために必要だ」という良い言葉を頂いたので、これを心に留めて文化芸術政策を進めて参りたいと思う。プレーキとアクセルを両方上手に踏みながら進めていく現状であり、京都市京セラ美術館や京都コンサートホール、ロームシアター京都などは、ほぼ定員の制限なく営業しているが、高齢の方を中心に出控えていることもあり、なかなか満員にならない。美術館も予約制ではあるが、満員にはならないので、当日来ていただいても入れるようになっている。

また、オンラインがこれからの1つの課題である。委員からもあったように配信のレベルがまちまちであったり、権利関係が整理できないまま配信されていたということもある。有料にして対価を取っていくことも大事である。先日のオンライン配信の連続講座では、パソコンのスイッチの入れ方を聞く受講者もいたようで、このデジタル社会の実態を垣間見たと担当者から聴いている。今は全くの手探りで進めているところであり、その場その場で判断をしながら、後から振り返った際に後悔しなくていいので、今最大で考えられることをやったらいいと、皆に伝えて進めてきた。

最後に財政難について、今まで財政状況が良かった話を聞いたことがないが、今回の財政難は本当に厳しく、来年度は500億円の財源不足が見込まれている。副市長からもあったとおり、そのことと背中合わせにしながら文化芸術政策を進めていかなければならないと思っている。知見、ネットワーク、御経験も非常に豊富な先生方には、引き続き御指導をいただきながら、手探りではあるが文化芸術施策を充実させていきたいと考えている。引き続き御支援をお願いしたい。